

十二月の贈りもの

松田妙子

日本ではクリスマスは宗教行事というより、十二月の娯楽として定着したようです。日本人の宗教的な節操のなさとも言えますが、暗く寒い冬に、華やかな装飾や音楽で、楽しい気分を演出するのも悪くない、と私は思います。

小さい頃、いつも遊んでいた空地で、大発見をしたことがあります。草むらの中に、ベルや銀モールなどの、キラキラ光るクリスマススの飾りが沢山落ちていたのです。何という不思議！私たちは思いもよらない宝物を発見した喜びに狂喜しました。後で思えば、商店街が何かで不要になった装飾物を、誰かが捨てただけだったのかもしれませんが、子ども私たちのには、それこそサンタクロースの贈り物のように思えたのです。

昔、「戦場のメリークリスマス」という映画がありました。ビートたけし演ずる

日本の軍人が、連合国軍の捕虜に向かって言う英語が「メリークリスマス」。なぜ「グッドモーニング」でも「ハロー」でもなく「メリークリスマス」なのか。私は、異なる宗教、異なる文化を持つ人々との対話の象徴であろうと考えました。

そういえば、ベトナム戦争にも「クリスマス停戦」がありました。アフリカの飢餓を救えというキャンペーンで、欧米のミュージシャンたちが作った歌の題名が、「彼らは今日がクリスマス



だということを知っているだろうか」という意味だったり。考えようによっては、キリスト教文化圏にある者の傲慢ともとれます。クリスマスなんて関係ない宗教を信じている人も、世界には大勢いるのですから。

先日、例の運動依存で公園を走っていたら、手押し車につかまった老婦人がよろよろとやって来て、私に拍手しました。「いつも窓から見ていたの。この公園は滅多に人も来なくて寂しいから、あなたが頑張っているのを見て、涙が出てきた」と言うのです。それを言うために、不自由な体でわざわざ寒い戸外へ出てきたのか！私にとっては、「嫌でも毎日果たさねばならぬ義務」のための、捨て石のような時間だったのに。それをこの人は、涙が出るほど有り難がってくれるのか。

確かにその公園は中途半端な広さのせいか、遊ぶ子どもも滅多にいません。街の片隅に忘れられたような公園を、日がな一日眺めながら、この老婦人は何を考えていたのでしょうか。おそらくは、世人に忘れられたような生活の中で、どんな人生を背負ってきたのでしょうか。たまたまそこを、自分なりの理由で走っていた私。そう考えると、世の中の全てのこととはつながっている、と思えてきました。そしてこの世が、とても愛しいものに感じられてきました。

実は私は、日々の生活に倦み疲れていたのです。講演会や映画や討論会で、私は次々とさまざまな問題に出会います。沖縄の集団自決、死刑制度の是非、イラク戦争、朝鮮半島の南北分断、障害者への強制不妊手術・・・等々。どれをとってもこの上なく深く重い問題なのに、私は淡々と日常業務をこなすようにして、それらを消費しているだけのようない気がします。当事者たちの思いを、私は到底受け止めきれないで流しているだけだ、と。自分がそんなだから、自分の作る作品も、単なる消耗品のように

思えてくるのです。私が苦勞して絵や文章を書いたって、ただ人に消費されるだけだ。

でも、世界は今もキラキラ光る宝物に満ちていて、私が見つけられないでいるだけかもしれません。そして時たま、あの老婦人のような人が、私の元へつかわされるのかもしれない。幼い時見つけた、ベルの一つ分くらいの輝きには、気づかせてもらえないように。

「めいめい自分の神さまがほんとうの神さまだと言うだろう。けれどもお互い、べつの神さまを信じる人のしたことも涙がこぼれるだろう。」—— ああ、あれは宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」で、私が最も涙した言葉。敬虔な仏教徒であった彼が、いかにキリスト教を美しく描いたかを思う時、私は仏教の懐の深さに打たれる思いがしたものです。その思いを留めておくためにも、クリスマスはいいものです。「べつの神さまを信じる人のしたことも涙がこぼれる」から。

「飾り」って、物事の本質とは違う、余計な物のように思えて、良くないもののような気がしていたけど。でも仏教にも、「莊嚴」という言葉があると聞きました。仏像などのまわりをきれいに飾りつけすることだ。なら飾りもまた、大切なものなんですね。どうせ私のような者には、何が飾りで何が本質なのか、見分けもつかないんだし。金色や銀色に光るクリスマス飾りが街を彩る十二月。太平洋戦争開戦の日がお釈迦さまが成道なされた日もある十二月。

今年も十二月を迎えることができた、それが何よりも贈り物かも。

2010、12、10、8:30PM*

仏事ひとくちメモ 御布施

葬儀には、僧侶に差し上げる包みもの「御布施」を準備しなければなりません。布施の語源をたずねてみますと、古代インドの言葉でダーナといい、慈悲の心をもって施すこと（喜捨）を意味しています。そして、仏教では、布施を次の三種に分けています。

- ① 法施（仏さまの教えを説き聞かせること）
- ② 財施（衣食などを施すこと）
- ③ 無畏施（畏れない安心を施すこと）

僧侶に差し上げる御布施は、この財施にあたります。日ごろの私たちは、品物やサービスの売買という経済感覚（利潤の追求）で物事を計ってしまいます。御布施に関して、「いくらお包みしだらよいのですか」という質問をよく受けますが、この感覚も同じように思えます。

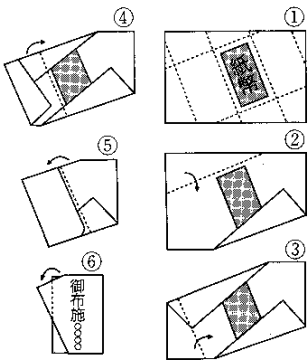
そしてこの感覚は、仏教が伝えてきた人間のいのちそのものにも値段をつけてしまうことになるのです。本来、人間の尊いいのちには値段をつけられるものはありませんし、ましてや他人にも決められるものではないのです。

故人は死をとおして、「人はみな死ぬ」という事実を身をもって教え、「これからどのように生きるのですか？」という、大切な問いを投げかけてくださいました。その問いに応えることは、生きていくことに心から喜べる生活に目覚めることなのでありましょう。この目覚めこそが、尊いいのちに生きる新しい「私の誕生」を意味するのです。

尊いいのちにあい得た法施の喜びは、喜んで捨てるという財施の心を生みます。ですから、大切な人を亡くした大きなご縁に差し上げる御布施は、亡き人への、そして仏さまへの、精一杯の報謝の気持ちを表すものなのです。

さらには、その尊い志は仏法に生きる新たな人を生み育てることにもつながるのです。このような意味から、包みもの（金封）の上書きには、「御経料」や「読経料」ではなく「御布施」と書くのです。

御布施の包み方の一例



半紙などで包み、数字の順に折る。表書きは、「御布施」と書く。